授業研究

問題の提起・音楽科

集団表現の中で一人ひとりの思いを表す合唱づくり

――学級担任と連携して――

広島大学附属小学校教諭　梅比良麻子
広島大学附属小学校教諭　丸田健太郎

指導案や写真などの資料がご覧いただけます。ぜひご利用ください。

一　はじめに

一人で楽器を演奏したり、一人で好きな音楽を聴いたりすることの楽しさが存在する一方で、学校の音楽教育では学級の大勢の友達と共に音楽を学ぶ。例えば、隣の友達の声に勇気づけられてもっと声を出そうとしてみたり、自信がなくても友達と一緒なら挑戦してみたりするような意欲面で高め合えるという点の集団学習のよさがある。即興や音楽づくりの分野では、一人では思いつかなかったアイデアで表現の幅が広がったり、鑑賞の分野では友達のイメージから新しい聴き方ができるようになったりする。表現の分野での集団演奏の醍醐味は、何より大勢による迫力のある表現や音がそろったときのかっこよさだろう。特に、それぞれの技能に適した楽器を選び、各々のパートの役割から集団表現に貢献していくことができる器楽合奏は、特別な支援が必要な子どもを含め、全員がよさを発揮しながら表現することができる。一方で、声を合わせて一つの表現をつくっていく合唱という表現形態では、一人ひとり異なる個性を持つ「個」がどのような在り方をして、自分の思いを表現したり、あるいは埋もれたりしているのだろうか。集団表現の中で、個々それぞれでよいこと、必ず一つにしないといけないことは何であろうか。

本校の研究テーマ「〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成」の最終年度にあたる実践では、個々がそれぞれに表現する即興・音楽づくりの分野ではなく、合唱という集団形態において、どのように〈他者＝自分の認識に収まらないもの〉に出合い、自分を広げていくのかを考えていくこととした。

二　学級担任と行った選曲

(1) 合唱における〈他者〉

各学級の選曲にあたっては、その学級の歌声の感じやクラス目標、担任の思いなどを考慮して曲の雰囲気や歌詞の内容で決めるようにしている。しかし、音楽科の授業内では音程をとること、パートに分かれてハーモニーをつくれるようになること自体に時間が割かれ、その曲の伝えたいことにじっくり向き合ったり、話し合ったりする時間を十分に取ることができない。伝える内容が共感できていないままに本番を迎えてしまうと、どこか他人事の歌となり、やらされている感じが出てしまう。そこで、〈他者＝自分の認識に収まらない対象〉を「いったん歌えるようになった歌が自分事としての距離感で表れること」として設定した。本実践では、国語専科の5年学級担任の丸田健太郎教諭と連携し、歌詞の物語を自分なりに解釈した上で、自分と歌詞を重ね合わせながら表現できるようになることを目指した。

(2) 丸田教諭との雑談から

本校の合唱祭の取り組みは、音楽科の授業以外に朝の会や帰りの会などの学級の時間をつかって練習したり、楽曲紹介について話し合ったりさせるため、学級担任の協力なしでは成しえない。音楽科の視点から子ども達にとって一歩成長できる要素が盛り込まれた曲であり、学級担任の思いも反映された曲になるようにどのような曲がいいかを伺うことがある。丸田教諭からは「暗い曲がいいです。」と返答があり、その真意を聞いている内に単純に短調でつくられた曲というわけではないことが分かってきた。

(3) 学級担任の思い

合唱祭の曲を決めるにあたり、これから児童にどのように生きてほしいのかを考えた。心身が大きく成長する高学年となり、ただただ楽しいことよりも、悩んだり立ち止まったりするような機会がこれから増えてくるだろう。そのように考えると、ただ明るく、希望に満ちた曲